

連載  
第62回

# 福聚山史

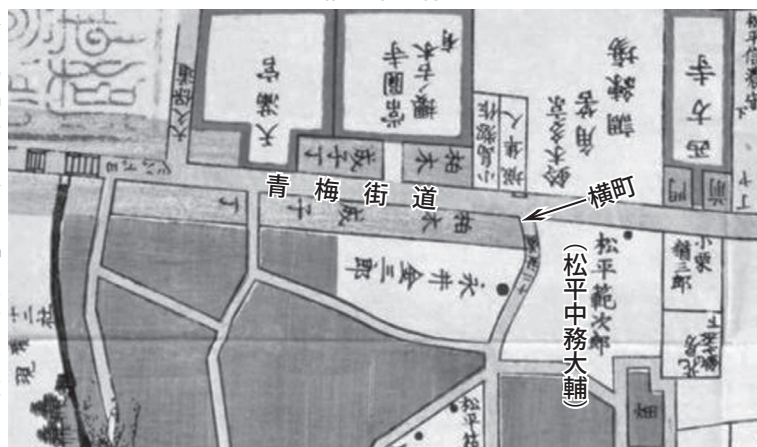
池浦 泰憲 文  
及川 一晋 編

## 成子町の下水事情①

江戸の町々から提出された「町方書上」(文政十年(一八二七))の次の記述から、常円寺周辺の様子を今回も見てみよう。

一 下水 町内掛かりに候(長さ両側に  
て百五拾間程 幅式尺)

右、松平中務太輔様御下屋敷脇横町  
の際より、柏木村へ流れ申し候横切



柏木村

絵図①『江戸切絵図』『内藤新宿千駄ヶ谷

絵図』(嘉永二年(文久二年刊)

下水

石橋ヶ所、下水の幅式尺、橋の幅

三間四尺五寸

一 當町ならびに淀橋塚横町、両町掛か

り下水

長さ両側にて三五〇間程、幅式尺

當町より淀橋町へ流し申し候

右下水石橋ヶ所、下水の幅式尺、

橋の幅壹間四尺

今回は「下水」である。日々の生活にお

いて水は切つても切れないものである。そ

れは、私たちが口にしたたり、身を綺麗にし

たりするいわゆる「上水」はもちろん、一

方で排出される「下水」をどのように管理・

整備していくかも、人びとの生活、町の形

成・維持にとって重要な問題であった。そ

のような点から、「町方書上」に町の「下水」

についての記録が命じられたのであろう。

さて、書上は二条ある。一条目は「町内

掛かり」、二条目は「當町ならびに淀橋塚

横町、両町掛かり」とあり、成子町に関わ

る二つの「下水」について書かれている。

現代では、下水は捨てる水そのものを指し、

それが通る配管や溝は「下水道」と呼ばれ

るが、当時は両方を指していたようである。

今回は一条目をみてみよう。まず、長さ

は「百五拾間程」(約二七〇尺)、幅は「二尺」

(約六〇センチ)であったと記され、続いてこ

の下水の詳細について「右、松平中務太(大

輔様御下屋敷脇横町の際より、柏木村へ流  
れ申し候横切下水」とある。「松平中務太  
輔様御下屋敷」とは、同じ「町方書上」に、「東  
之方」の隣町として記され、掲載の絵図①  
の「松平範次郎」と記された場所がそれに  
当たる。

そして、下水はこの松平家の下屋敷の脇

の「横町の際」から柏木村に流れるもので

あるという。「横町」とは、表通りから横

へ入った町筋のことであり、青梅街道から

成子町と下屋敷の境界にある道のことであ

らう。そこから「横切下水」が「柏木村」

へ流れるという。柏木村は青梅街道の北側

一帯に位置する村であるが、この場合、絵

図①でいえば常円寺の背後の地域であろ

う。また「横切下水」とは、下水を町から

町へ流すために道路を横断していた「下

水(道)」のことを指す。絵図①からわか

るように、「成子

丁」は青梅街道を

挟んで両側に町家

が並び、松平家の

下屋敷は青梅街道

を挟んで柏木村の

反対側にある。し

たがって、下屋敷

との境からでた下

水は、青梅街道を

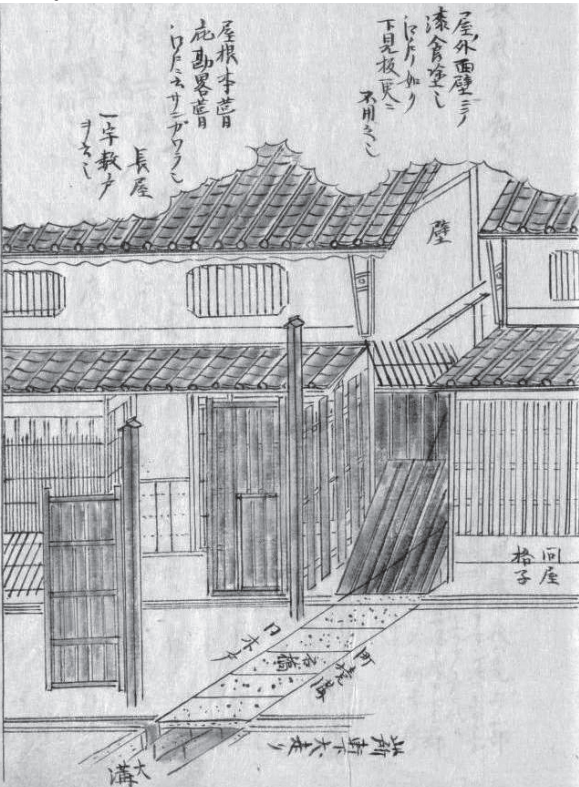
横断して柏木村へ

と流れていたとい

うことなのである。

さて、こうした

下水はどのような



絵図②／絵図下方に「石橋」がみえる

形状をしていたのだろうか、絵図②を参考

にみたい。この喜田川守貞の『守貞謄稿』(守

貞謄稿とも、天保八年(一八三七)から約

三十年間書き続けた、江戸時代後期の風俗、

事物を説明した一種の類書(百科事典)に

みえるものは、町の境に下水(絵図では

大溝)が走り、「石橋」で蓋をしているこ

とがわかる。「町方書上」の今回の一条目

の最後に「石橋ヶ所」とあるが、おそら

くこの下水はこうした形状のものであつた

のだろう、そしてこの石橋は青梅街道を横

切る所に設置されたのではないかと考えら

れる。その幅は「三間四尺五寸」(約六・

八尺)であつたという。ここから当時の青

梅街道のおおよその道幅も類推することが

できるのではないだろうか。

今回は、二条目の読解さらに当時の下水

事情についてみていきたい。(続く)